

であったが、生存期間の延長は認められなかった。

悪性 glioma に対する本法の有用性は不明だが、本法は密封小線源による低線量率照射に比べ利点も多く、今後検討を加えることで、有用な手段になり得ると考えている。

47) グリオーマに対する放射線化学療法と放射線単独療法との比較

斎藤 均・峯浦 一喜 (秋田大学)
柳田 範隆・坂本 哲也 (脳神経外科)
古和田正悦

近年、グリオーマの術後に放射線化学療法を併用しており、その治療成績を従来の放射線単独療法と比較検討して報告した。

グリオーマ53例(良性17例,悪性36例)に、6~8週間で50~60Gyを照射し、ACNU 0.5~1mg/kgを1~6回、FT-207 750mg/dayを投与した。治療後、神経症状は改善13例(25%)であり、腫瘍の縮小(CR+PR)はCTで評価し得た42例中12例(29%)にみられた。骨髄抑制は12例(23%)、肝機能障害は8例(15%)にみられた。良性グリオーマの直接法による1年、3年、5年の生存率はそれぞれ100%、57%、33%であり、悪性グリオーマでは66%、27%、11%であった。生存率に関して放射線化学療法による有意な上乘せ効果はみられなかった。

48) 頭蓋底浸潤悪性腫瘍に対する化学放射線療法の検討

村上 寿治・高橋 明 (岩手医科大学)
斉木 巖・鳴海 新 (脳神経外科)
小保内主税・金谷 春之

頭蓋外より脳内に浸潤する悪性腫瘍、主として副鼻腔原発の扁平上皮癌(SCC)と腺癌に対する外科的、保存的治療の特徴と成績を検討した。外科的治療では広範lobectomy, 人工硬膜, 自家骨による頭蓋底形成, Spinal drainage, フィブリン糊の使用などが重要である。SCCに対してはCDDP+PEPを主体に、腺癌についてはACNU+VCR+FTを中心にして同調化学放射線療法を行ない、6例中5例に腫瘍の完全消失を認めた。そして外頸動脈からの持続動注法は有効な方法であった。生存期間をみると、保存的療法が外科的治療よりすぐれており、治療においては最初に同調化学放射線療法を行ない、その後外科的治療が検討されるべきものと思われた。

49) シルビウス裂内脂肪腫の一手術例

小笠原邦昭・金城 利彦 (仙台市立病院)
小沼 武英 (脳神経外科)

我々は、シルビウス裂内に発生した稀な頭蓋内脂肪腫の一例を経験し全摘したので報告する。症例は14才の男性で約2年前より異常行動の発作が出現し、当院精神科にて側頭葉てんかんの診断をうけ、抗けいれん剤の投与をうけていた。脳波では、右側頭部に焦点性棘波を認めた。CT scan を行ったところ異常陰影を認め当科に入院した。CT scan では左シルビウス裂内に-124 CT値の低吸収域を認め、類皮腫あるいは脂肪腫の診断のもとに開頭術を施行した。手術では、シルビウス裂内に、2.5cm×3cm×3cmの黄色の実質性腫瘍を認めた。腫瘍は中大脳動脈の末梢枝と強く癒着していたが、顕微鏡下に慎重に剝離、全摘出を行った。病理学的に脂肪腫であった。

50) 頭蓋内類表皮腫の4例

石井 久雅・林 実 (福井医科大学)
伊藤 治英・古林 秀則 (脳神経外科)
河野 寛一・兜 正則
白崎 直樹・広瀬 敏士

最近経験した4例の類表皮腫の診断に、CTscan, Metrizamide CT cisternography 及びMRIが有用であったので、その所見について検討し報告する。症例は、シルビウス裂部1例(62才男性) 大脳縦裂部2例(25才女性)(62才女性) 大槽部1例(60才男性)である。CT所見では、3例では低吸収値を示し、他の1例は高吸収値を示す腫瘤陰影を認めた。2例にMetrizamide CT cisternographyを施行し、カリフラワー状の陰影欠損を認め、腫瘍の局在と周囲組織との関係の診断に有用であった。1例にMRIを施行し、CT scanでは判別不可能であった低吸収域の不均一性が判定可能となり、他の低吸収値を示す腫瘍との鑑別診断に有用であった。

51) レジン板上に再発した傍矢状洞部髄膜腫の一例

広田 茂・下瀬川康子 (国立水戸病院)
園部 真・甲州 啓二 (脳神経外科)
高橋慎一郎

症例は61歳の女性で、6年前、左傍矢状洞部髄膜腫との診断で全摘術を施行した。手術時、頭蓋骨が肥厚しており、骨と硬膜が一部癒着していた。肥厚した骨を除去し腫瘍を全摘後、死体硬膜及び人工骨にて形成した。組織学的にはtransitional typeであった。今回、右前頭部が隆起してくるのに気づいた。腫瘍は、右前頭部

に存在し、皮下でレジン板上及び骨上に弾性硬の腫瘤が存在し、頭蓋骨へ連続的に移行していた。皮下の腫瘤を摘出し、骨に接着する部位は削除した。組織学的には、meningotheliomatous meningioma であった。本症例は、頭蓋骨に浸潤したもよりの再発と考えられ、髄膜腫の手術に際し、留意する必要があると思われた。

52) 興味ある経過をたどった腫瘍内出血を呈した頭蓋咽頭腫の一例

北 秀幸・嘉山 孝正 (国立仙台病院)
 小川 彰・桜井 芳明 (脳神経外科)
 和田 徳男
 吉本 高志・鈴木 二郎 (東北大学脳研)
 (脳神経外科)

我々は、頭蓋咽頭腫で腫瘍内出血を起したにもかかわらず、症状が軽快した一例を経験したので報告する。

症例：33歳男性。1985年春頃より前頭痛、7月頃より複視、9月初旬には見当識障害が出現し、当科へ入院。CT では、第3脳室を充満し、一部石灰化を伴ったやや低吸収域を示す mass を認め、水頭症を呈していた。ところが、入院後1週間目頃より見当識障害が消失し、そのときの CT では腫瘍内に低吸収域を認め、腫瘍内出血と考えられたが、mass は減少し、水頭症も軽減していた。その理由として、腫瘍自体が多房性であるため、その一部の Cyst に出血し腫瘍内圧が上昇し、他の Cyst が rupture し、全体としての容積が減少したためと思われた。

53) 天幕上下に伸展した腫瘍の手術例

畑中 光昭 (十和田市立中央病院脳神経外科)

小脳橋角部髄膜腫1例、斜台髄膜腫1例、小脳橋角部類上皮腫2例の計4例のテント上下に拡がる腫瘍に対して摘出術を行なったが、Transpetrosal-Transtentorial Approach 3例、第1期に Suboccipital approach、第2期に Subtemporal approach の2 stage で行ない全摘した1例であった。Transpetrosal-Transtentorial approach のうち1例は petrosal bone にかくれて Tumcor の全摘できず、2 stage で全摘した例が1例あった。2 stage で全摘する事は問題ないが、白馬の Transpetrosal-Transtentorial approach より、より前方に開頭をのぼし、Subtemporal approach に余裕を持たせると、temporal damage もなく、1 stage で腫瘍全摘できる例が増えるものと思われた。

54) 最近経験した聴神経鞘腫の検討

渡辺善一郎・川上 雅久 (福島県立医科)
 浅利 潤・根本 仁 (大学脳神経外科)
 山尾 展正・児玉南海雄

1982年10月より1985年6月迄経験した聴神経鞘腫17例について検討した。14例(82%)は、腫瘍の長径が4cm以上の非常に大きな腫瘍でありこのうち6例は他の施設で既に部分摘出術を施行されて再発した症例である。手術は後頭下開頭で全例腫瘍全摘術を行ない、1983年4月以降は術中神経刺激装置を用い顔面神経の温存を試みた。顔面神経麻痺が残存した症例では、ADLを一段階下げて評価すると、手術6ヶ月迄では、ADL1が5例、2が10例、3が1例、消化管出血で1例死亡した。術中モニター導入以降の顔面神経機能の温存率は71%であった。聴神経鞘腫の治療成績を向上させるには、早期診断及び術中脳神経機能の温存に努めるべきである。

55) 天膜髄膜腫の臨床像

— 自験17例の検討 —

加藤 正哉・鈴木 晋介 (東北大学脳研)
 新妻 博・鈴木 二郎 (脳神経外科)

1968年～1984年の間、当科で経験した tentorial meningioma 17例について、臨床像と手術手技及び手術結果について検討した。症例の内訳は男5例、女12例で、年齢は26歳～71歳平均48歳であった。初発症状は17例中11例が頭蓋内圧亢進症状で、4例が小脳症状、2例が脳神経症状であった。腫瘍の進展方向ではテント上下に又がるものが8例あったが、このうちテント切痕付近に発育した3例は subtemporal-transtentorial approach にて摘出が可能であり、一方テント後半部で上下に又がる進展をしめた例では、テント上下での開頭が必要であった。手術結果は全摘11例、亜全摘が5例であったが術後死亡が2例あり、それぞれ出血、及び広範な小脳浮腫によるものであった。追跡調査の結果再発を思わせる経過のものはなかった。

56) 新生児 optic glioma の2症例

安藤 彰・大熊 洋揮 (弘前大学)
 轟麦田英治・蛭名 国彦 (脳神経外科)
 鈴木 重晴

新生児期に発症する脳腫瘍は、それ自体先天性とも考えられ数少ないものであるが、最近私達は中でも稀と思われる optic glioma の2症例を経験した。第一例は生後25日頃発症の男児、第二例は生後50日過ぎに発症の女児であり、2症例とも軽度意識障害、哺乳力不良、視力障害をもって初発している。両症例とも手術が行なわ